顔

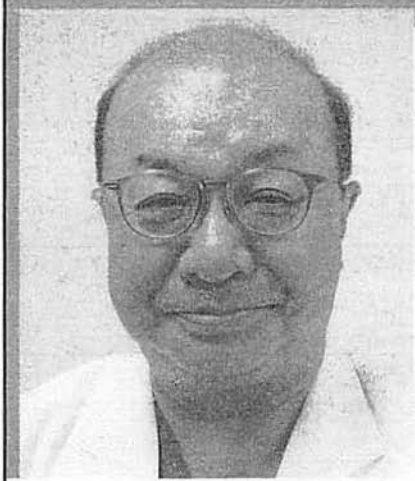
日本脊髄外科学会の理事長に就いた

飛騨 一利氏

後進の育成に尽力

日本脊髄外科学会の発足から会員として加わり、2015年には第30回の節目となる学術集会を札幌市で主宰した。長らく脊髄外科学会の教育委員として、後進の育成に尽力するなど、同学会の発展に深くかかわってきた。

近年、さまざまなデバイスの開発もあって「脊髄外科領域は顕微鏡・内視鏡等による低侵襲治療が主となり、疼痛対策が進み、患者の負担が軽減されている」という。



脊椎脊髄分野は、脳神経外科だけでなく、整形外科も関与するが、脊椎脊髄共通専門医作成委員を長く務め、さらに脊髄ジャーナルの編集人も行ってきたこともあり、人脈は広い。

「それぞれの科で得て不得手があり、互いに理解することが重要。各科の専門的な視点から脊髄疾患を見直し、さらなる治療の発展につなげていきたい」と意気込む。

新型コロナウイルス感染症の影響で学会活動が制限されているが、術後合併症はゼロを目指し、後進の教育に力を入れていく考えだ。

25年近く北大で研究・治療に従事した後、札幌麻生脳神経外科病院院長に就任、現在に至る。

2021年6月25日掲載